

中国籍の「外国人学生」の存在とは

永井智香子

長崎大学留学生センター発行
長崎大学留学生センター紀要
第17号 抜刷

2009年6月

中国籍の「外国人学生」の存在とは

永井智香子

1. はじめに

「日本に住む外国人215万人のうち、中国・台湾人は61万人を数え、韓国・朝鮮人の59万人を抜いて最大勢力になった（07年末、在留外国人統計）。日本国籍を持つ人らを含めれば70万人を超える・・・」という文章で紹介されている朝日新聞の「在日華人」というシリーズがある¹⁾。その第2部(2009年3月9日の朝刊掲載)では日本の教育現場(高校)が取り上げられていた。読んでいて、「各地で難関といわれている進学校でも、中国人生徒が存在感を増している。こちらは日本育ちの子供たちだ」「こうした生徒たちの父母の多くは80年代以降に留学などの身分で来日した中国人だ」などという文章が目にとまった。そして、これらの文章から筆者が最初に連想したのは大学に在籍する中国籍の「外国人学生」の存在である。

ここで取り上げる「外国人学生」は「外国人留学生」とは違う。大学の私費留学生の募集要項²⁾の出願資格に「外国において学校教育における12年の課程を修了した者」とあるように、「外国人留学生」はそれぞれの母国で高校を卒業している。それに対して「外国人学生」は日本の高校を卒業し、一般の日本人の学生と同じ条件で入試に臨み、大学に入学して来た外国籍の学生のことである。

親の仕事や留学に伴って子供のときに来日し、そのまま日本の大学に進学している中国籍の「外国人学生」と「外国人学生」として日本の大学に通う子供を持つ中国人の親に的をしぼり、「外国人学生」のアイデンティティ、言語環境などをさぐるためにインタビューを試みた。本稿はインタビューの結果のまとめに若干の考察を加えたものである。学生2人、親3人とインタビューをした人数は少ないが、興味深い発言もあった。

2. インタビューについて

インタビューは許可を得てテープに録音し、データとして全て書き起こした。インタビューの時間は一人だいたい30分前後であった。インタビューの方法は半構造化面接、つまり、一応の質問は用意するが、流れにまかせて自由に話しを展開させてゆく方法をとった。質問事項としては、学生には来日年月日と来日時の年齢のほかに大きくわけて①日本の学校への編入に関して②言語に関して③アイデンティティに関して④将来への希望に関して⑤その他(留学経験があるものにはそれに関する事など)などについてきいた。

一方、親には本人の来日年月日に合わせて、子供の来日年月日と子供の来日時の年齢のほかに①子供を日本の学校に編入させることに関して②言語に関して③子供を日本の大学に入れることになった経緯に関して④親から見た子供について⑤子供の将来に期待することなどについて聞いた。

インフォーマント全員に十分な日本語力があると判断し、インタビューは日本語で行った。

2-1 インフォーマントについて

インタビューを行った二人の学生はいずれもインタビュー時大学2年である。ここでは学生A、学生Bとする。

学生Aは親の留学に伴って来日し、3歳から5歳まで日本の保育園に入り、その後、帰国して中国で小学校1年生を終え、小学校2年生のときに日本の小学校に編入している。

学生Bは親の仕事の都合で14歳で来日し、中学2年に編入している。

インタビューをした二人の親に関してであるが、いずれも日本の大学に在籍している子を持っているが、学生A、学生Bの親ではない。ここでは親C、親Dとする。

親Cは本人の留学で来日し、最初は単身であったが、子供が10歳のときに日本に呼び寄せ、子供は小学校5年生に編入した。インタビュー時、子供は大学2年生に進級する直前であった。

親Dは日本で単身赴任として働く配偶者に呼び寄せられて子供とともに来日している。来日時、子供は6歳であった。小学校への入学年齢であったが、日本の教育関係者のアドバイスにより、1年間幼稚園に入れたあと、7歳で小学校に入学させたとのことである。

もう一人を親Eとする。親Eは本人の留学で最初単身で来日し、その後、子供を呼び寄せ、幼稚園から小学校の2年生の前半までの約2年間日本に滞在させ、その後、中国に帰し、再び、中学校1年生のときに呼び寄せ、9ヶ月間だけ日本の中学校に入れている。その後子供を中国に帰し、現在子供は中国の中学3年生である。その子供は中国ではいわゆる「帰国子女」である。

今回日本の大学に通う子供を持たない親Eにもインタビューを試みたのは親が日本で大学まで行かせるかどうか決断する時期についてのなんらかの情報を得られるのではないかと思ったからである。

3. インタビューの結果

ここではいくつかの項目に分けてインタビューの結果をまとめてみたいと思う。

3-1 中国語力と日本語力

インタビューをした全員が家庭での会話は中国語とのことである。学生A、学生Bのインタビュー時の中国語力についてであるが、大学に入ってから半年弱、中国の大学に短期留学したことがある学生Aは次のように語った。「授業、最初ついていけなかったですね。寝るしかなかった。ほんとにわかんなく過ぎて」と言った。そこで、日常会話に困らなかったのではときくと「会話がぎこちなくて、もう小学生と話してるみたいって言われました」とのことである。さらに、「向こうでまず会ったときにこんにちはって体を若干前のめりにして挨拶するだけで気持ち悪い、よそよそしいって怒られて」「初めは日本育ちの中国人、だけど、ほとんど中国語わかんないみたい。まあ、宇宙人みたいな感じですよ」と幼少時に来日してから家庭ではずっと中国語を話していたが、中国の大学では最初はなかなか通用しなかったようである。その後の努力で急速に中国語力を上げ、1ヶ月ぐらいで、授業にもついていけるようになり、留学で得たものの一つとして「中国語が書けるようになった」ことをあげた。しかし、同時に短期留学を終えて日本に戻った時点で自分の中国語力に関しては「・・・最後の最後までへこみました」とまだまだと思ったようである。

学生Bは学生Aに比べ14歳と来日した年齢が高い。「普通の会話（中国語の）は全然大丈夫です」というのは当然のことである。大学生になってから

通訳のアルバイトもしたことがある。本人も14歳で来日したことがよかったと思っているようで「もうちょっと小さかったら、中国語完全に忘れてたりするんじゃないですか。もっと上だったらたぶんここまで（日本語が）流暢にしゃべれない。だから、ちょうどよい時期に・・・」という。それでも、中国語の読み書きは多少苦手なようで「問題あります。難しい。文学的なものはやっぱりちょっと抵抗あります」とのことである。さらに、「中国の方と喋っていると自分の言いたいことがはっきり伝えられなかったりするんですよ。自由にはしゃべれるけど、日本語のほうが伝えやすいなあと思ったりします」と14歳までの中国語は日本語に比べて自由に操れない部分もあるようである。

学生Bは国ではまったく日本語を勉強せずに、14歳で来日したあと、どうやって日本語を身につけたのかと聞くと、「最初は本当に全くききとれなくて、でも、3ヶ月ぐらいして、ある日突然うそのように」とのことである。さらに、「テレビとかいっぱい見ましたから・・・テレビって本当にすごい勉強になるんですよ」とテレビの効果を強調した。中学校で特別に日本語のクラスや取り出し授業があったわけではないという。最初は中国の小学校で少し習った英語でコミュニケーションをとっていたそうだ。これは学生Bの母親にきいた話しであるが、もし、半年たって慣れなかったら娘と中国に帰るつもりだったとのことである。

親Cによると、10歳で来日し、現在大学生の子供の中国語は「日常会話は大丈夫」「読むが、だいたいできる。だいたい、90%ぐらい大丈夫」と、話したり、読んだりするのはだいたいできるが、書くことができないという。また、親Dによると、子供が大学1年生の春休みに中国の大学で3週間勉強する機会があり、そのときのことについて「大学でまったく困らないということもいえないですよ。やっぱり書くほうは力はないですよ。まあ、日常会話とか、先生の授業をきくとか大丈夫ですけど・・・きくときはメモをする。中国語です。それでいつも辞書をもって、かなり、3週間は楽しく勉強できたみたいです」とのことである。いつのまにそのような高い中国語力を身につけたのかときくと「両親とも中国人ですから、家で中国語で話をするので」、さらに「大学に入りましたら、ちょっと上級中国語をとって、ちょっと半年ぐらい週に2回中国語を勉強してきたんですよ」と子供は大学に入ってから自主的に中国語を勉強していたようである。

3-2 親の心配と決断

留学や仕事で子供を日本に連れてくる場合の親の心配はやはり、言語のことのである。最初は3年の予定で来日した親Dは「最初は学校に通いながら、家で中国の本を持ってきて、家で中国の算数とか国語とか勉強しました。・・・国に帰るつもりでした。ですから、日本の勉強はだいたい日本という国がわかりましたら、それでいいです。特に真面目に勉強させてないです」と来日当初は帰国後のことを考えて中国の勉強をしっかりとさせていたようである。

また、在日期间が長くなり、来日時から将来子供を日本の大学へ入れるとはっきりと決めていたわけではないが、子供を帰国させるか、日本の大学に進学させるか決断をしなければならない場合がある。そのことは親Cの「高校に入ったら、もういろいろ調べて、中国の大学の進学のこととかいろいろ、一番問題が中国語の問題で、授業についていけない感じで、言葉の問題かなりきびしいので、そのときに決心して、高校1年の秋くらいに・・・」という言葉や、親Eの「中学1年生のとき・・・日本にいるか中国に戻るかは迷いました。・・・もし、日本にいたら、たぶん日本の大学入るしかないですね。国にもどる可能性もだんだんなくなる。・・・決心するのにちょっと時間かかりましたね」という言葉からもよくわかる。

3-3 アイデンティティについて

学生Aは自分を「日本人だと思いますよ。だって、小、中、高って日本なんだもん」「日本人ですよ。だからと言って、日本国籍にしようとか、名前を変えようとは思ってないです」「自分の国は日本です。へんな話ですけど」とはっきりと日本人というが、一方で「違うとは言われるんですよ。日本人と、友達に。お前やるのが違いすぎるって。でも、中国人にもお前はやるのが違いすぎるって言われるから」「いや、7、3ぐらいじゃないですか、日本が7、3が中国。でも、中身の性格とかは日本9ぐらい中国1ぐらい」などと微妙な発言もみられた。

学生Bにどこの国の人かと聞くと「それは中国人です」とはっきりと答える一方で、スポーツの試合で日本と中国が戦っていたらどちらを応援するかときくと「日本」という答えがかえってきた。その理由をきくと「日本でのいい思い出のほうがいっぱいあって、だから、日本のほうが好きで」という

ことである。さらに、中国で生まれ育ったことに誇りをもっているかときくと「それは、誇りを持ってますね」、どういう誇りかときくと「誇りっていうか、事実だから別に隠したりする気はぜんぜんない」という。さらに、学生Bに自分は中国人だと思うことはあるかときくと「ああ、何か名前とか聞かれたら、〇〇〇って答えるじゃないですか。ああ、中国人ですかって言われると、そういうときに意識しますが、他は特に・・・」と強い国籍に対する意識はないようである。

学生Aは小学校2年生から日本の学校に通い、学生Bは中学2年生から日本の学校に通っているという違いから、二人の学生の答えに違いがあるのは当然といえば、当然であるが、どちらにもその答えに微妙な部分があることは否めない。

3-4 日本で育ち、日本の大学生になったことについて

小学校のときにいじめにあったことがあるという学生Aに親はどうして自分を日本に連れてきたのだらうかと思ってたかときくと「思ってたよ、小さいとき」と親の都合で文化間移動を余儀なくされたことに対する不満を口にした。今はどう思っているのかときくと「今はなるようになってきたのかなって。だって、ここに来てなかったら、日本語こんなにべらべらしゃべれなかったし、中国語こんなしゃべれてなかったし・・・仮に日本に来なくて、中国で大きく育ってたら、まったく日本を知らないし、どうなったかかもわかんないじゃないですか。得してるはずなんですよ。っていうのをいろいろな人に中国で言われて、そうなのかなって思っ。こっちではむしろマイナスですよ」と本人と中国で出会った中国人は肯定的なみかたをしているが、日本社会は学生Aのような日本育ちの中国籍の学生をマイナス評価していると言った。日本人の大学の友達から就職活動のときに中国籍だと大変だという助言があったようである。

学生Bは「・・・日本に来なかったら、そういう違う文化とかに触れることがなかったら、狭いままの自分で終わってしまっていたと思うと、本当に来てよかった。・・・プラスになっています」という。日本に来なかった自分は想像できるかときくと「想像できない」と答えた。

3-5 中国についてどう思うか、日本についてどう思うか

学生Aは中国に短期留学してからより中国が好きになったという。「前も好きだったけど、ばあちゃんのとこ帰ってたから³⁾別な意味で嫌いじゃないですけど、こんな好きになったのは留学して帰ってきたからじゃないですか」という発言からそのことがわかる。ただ、「いや、好きにはなりました。でも、長くは住めないなっていうのもわかったから。・・・人、物、環境ほとんど好きでしたよ。でも、自分が将来そこに住んで働くって、一生とか絶対無理」と好きになったことと、長く住むことは別のようである。

学生Bは「本当に私、日本大好きなんですよ」「帰りたいとか一度も思ったことないです。遊びには、向こうの友達に会いにはちょっとぐらいなら帰ってもいいけど」という。その理由をきくと「周りの人は本当にいい人ばかりで」と来日後、いじめにあったこともなく、よい教師や友人に恵まれていたという。

3-6 国籍にとらわれない

学生Bは自分のことを「・・・国籍とかぜんぜん気にしないんですよ。国際人です」と言った。学生Bの言う国際人とは具体的にどのような人かときくと「国際的な視野を持っている人のことです。だから、一つの国にこだわったりせずに・・・」という答えがかえってきた。さらに、「すごく成長したなと思うんですよ。自分自身が。昔（日本に来る前）はそういうこと考えたことなかったんですよ」「日本に来て、いろんな人と違う文化と触れ合って・・・」と日本に来たからこそ国際的な視野が持てるようになったことを強調した。

学生Aは学生Bのように「国際人」、「国際的視野」などという具体的な言葉は使わなかったが、将来についてきくと「なんか自分でやりたいですよ。・・・なんか、中国関係するけど、製作とか日本と中国行き来する仕事を最後自分で探してつくりたいなと思っていますよ」となんらかの形で中国との関係がある仕事に就くことを希望している。

親Cによると子供は「国際的な仕事」「やっぱり、架け橋になりたい。ずっとその夢で、最初、国際関係の学部にはいりたかったんです」と国際的な仕事につきたがっているようである。そして、子供は世界の貧しい子供たちを援助するサークルに入り、活発に活動しているとのことである。

親Dも日本に来たからこそ、子供が国籍にとらわれていないことを強調し

た。そのことは次のような発言からもわかる。「彼はちっちゃいころからずっと日本にいるから、別にその国の概念はそんなに重くないです。やっぱり、国際的な感じはします。すごく。その点については私はすごくいいなあと思います。」「・・・なんか民族的な狭い意識はないです。私は彼にとって、すごく成功したと思います。学問的じゃなくて、やっぱり、人格的にやっぱり、日本に来てよかったと思います。もし、ずっと中国でしたら、やっぱり、狭い民族意識にちょっとしばられて、却って、かわいそうと思います」などである。さらに、親Dは「私は今回中国に帰って、中国は彼と同じ年の一部分の人はやっぱり、その愛国主義の影響で日本を憎んだり、なんかちょっと軽蔑したり、そういう意識がはっきり見えますよね。でも、彼はそれはぜんぜんないです。聞かれましたら、日本もいい国です。はっきり、中国人の前でいえるし、中国もいい国です。日本人の前でも言える。それはやっぱり、この十何年間日本に来て、すごく彼は彼の人格を大きくした・・・」と続けた。

ここで取り上げた発言から見えてくること、それは子供のときに日本に来て、そして、日本で育ったことにより、国籍にとらわれない、国際的な視野を持つ人間になったということではないだろうか。

4. まとめ

佐藤・片岡（2008）はアメリカで育つ日本の子どもたちのような二つの言語と文化をもつ子供たちを、「第三の文化」をもつ子供（third culture kids）ととらえたらよいのではないかと提唱している⁴⁾。そして、「つまり、自分が生まれた国の文化でも、自分が成長した国の文化でもなくそれらがミックスしたハイブリッドな新しい第三の文化を持つようになることです・・・」と説明している⁵⁾。

インタビューで語られた中国、あるいは日本に対する想い、アイデンティティに関すること、言語力に関すること、そして、国際的な視野を持つこと、これらを総合して考えると前述の「第三の文化」を持っていると言ってもいいのではないだろうか。その中身は純粹の中国人でもなく、日本人でもない。ニュートラルな視点で日本と中国それぞれの国をみることが出来る人間である。親の留学や仕事の都合で幼少時、あるいは思春期に文化間移動を余儀なくされたことによって生まれた非常に貴重な資質であると思う。そんな資質を持つ彼らは貴重な人材なのではないだろうか。

今回インタビューをした人数は5人と非常に少ない。より精度の高い結果を得るにはより多くの中国籍の「外国人学生」とその親にインタビューをする必要があると思う。これは今後の課題である。

さらに、「外国人学生」は中国籍の学生だけではない。そこで、中国籍以外の「外国人学生」とその親にインタビューを試みると興味深い結果が得られるのではないかと考えている。

注

1. 2009年2月10日に始まったシリーズで、以後、不定期で朝日新聞の朝刊に掲載されている。この文章は <http://www.asahi.com/special/kajin/> より引用した。
2. 参考にしたのは長崎大学の平成20年度の学生募集要項（私費外国人留学生）である。
3. 学生Aは中学3年まで毎年長期休みを中国の祖父母のうちで過ごしていた。
4. 佐藤郡衛・片岡裕子（2008）『アメリカで育つ日本の子どもたち』明石書店 227頁
5. 佐藤郡衛・片岡裕子（2008）前掲書 227頁

